

人財(市民)が躍動する情報・文化都市 「民学産公の協働」によるまちづくり

三鷹市政のエッセンスが 詰まった元気創造プラザ

今回の取材でまず訪問したのは、昨年4月に供用開始された三鷹中央防災公園・元気創造プラザである。市役所本庁舎の隣接地にある三鷹中央防災公園・元気創造プラザの敷地は約2ha。敷地の約6割を災害時には市民の一時避難場所にもなる中央広場・東広場・西広場が占め、敷地西端部分には地上5F・地下2Fの複合施設・元気創造プラザが建設されている。その延床面積約2万4000㎡のうち半分強は総合スポーツセンター。半分弱には「子ども発達支援センター(1F)」「総合保健センター(2F)」「福祉センター(3F)」「生涯学習センター(4・5F)」「総合防災センター・防災課(5F)」などの公共施設が入居し、災害時は施設全体が防災拠点になる。

敷地の大半は2007年4月まで同地にあった東京多摩青果株式会社三鷹市場の跡地だ。今回の取材で真っ先に訪問したのは、同地の買収と公共施設を中心とする跡地利用が、清原慶子・三鷹市長が2003年4月の就任後から足掛け15年間に掛け、完成に導いた『三鷹市民の悲願』ともいえる事業と、うかがっていたからだ。

「市長に就任して真っ先に行った事業の一つは、アスベストやPCBをはじめとした有害物質の危険性や耐震度など、既存公共施設の総点検(悉皆調査)でした。その一つの契機となったのが、実は市役所の隣接地で40年近くも青果市場を運営されていた東京多摩青果さんへの表敬訪問でした。東京多摩青果さんは当時既に全国でも最大級の青果卸売会社で、市役所の隣接地が本社だったため、『新しく三鷹市長に就任した清原です』とごあいさつにうかがったのです。そのとき社長さんから『清原さん、よく来てくださいました。しかし、せっかくお会いできた早々に申し訳ありませんが、当社は近々、事業規模拡大のため、残念ながら中央高速道路のインターチェンジ至近の国立市への引っ越しが決まったばかりなのです』とおっしゃるではありませんか。移転のお話は衝撃的でしたが、一方で『市役所の隣地は行政課題解決のチャンスにしなければいけない』とも思いました。市役所の隣に約2haのまとまった土地が空くことになる。これを何としても公共サービスの用地として生かすことはできないか。そう考えたのです。



きよはら けいこ
清原慶子
三鷹市長



多目的施設元氣創造プラザと広場で構成される三鷹中央防災公園

社長さんにあらためてお目にかかり、公共サービスに生かしたいとお話ししましたら、長年三鷹市で市場を展開してきたので、跡地を三鷹市民に役立つような形で活用していたら、とても嬉しいとおっしゃいました」

そして総点検（悉皆調査）の結果、「総合保健センター、保育も含めた各種の障がい児・者支援施設、社会教育会館、福祉会館などが軒並み老朽化しており、しかも現在地で建て替えるにもそれぞれ困難の伴うことが判明」

（清原市長）した。

「さらに調査を進める過程で、内陸部直下型の新潟県中越地震（2004年10月23日）、プレート型の宮城県沖地震（2005年8月16日）とタイプの違う大きな地震が続けて発生しました。特に直下型の中越地震の事例を踏まえ、公共施設の建て替えだけでなく防災拠点の整備も必要との意を強くするようになりました」

清原市長は常々「私は『参加と協働』を掲げて市長に就任させていただきました」と、インタビューなどで語っている。2006年には、自身のマニフェストに基づき、「主権者である市民の信託に基づく三鷹市政は、参加と協働を基本とし、まず市民のために行われなければならない」との基本理念を明示した、三鷹市政の最高規範である「三鷹市自治基本条例」を制定した。

また市長就任以前は大学の教壇に立つほか、第3次三鷹市基本計画の策定に先立って、市民の側の視点から提言をまとめる市民組織「みたか市民プラン21会議」で共同代表を務めるなど、主に文化・ソフト面の基盤に立脚した市

民活動にも力を入れていた。それだけに取材前、三鷹中央防災公園・元氣創造プラザへの市長の強い思いを知り、少し意外にも思った。しかし、実際に元氣創造プラザを訪問し、完成に至るまでの経緯の詳細を知るにつけ、この施設こそはハードとソフトの境界を軽々と超えた、清原市政4期15年間のエッセンス（素）の詰まったシンボルの一つなのだということが、よく分かった。

民学産公による協働のまちづくり

就任後すぐに実施した公共施設の総点検の過程で清原市長は、同時に「まず子どもに関



わる施設を優先的に整備しようということ
で、小中学校や保育園の耐震化100%を目
指し、達成」。併せて災害時に先頭で活躍し
てもらおう消防団の詰所10カ所もすべて耐震化
を図った。そうして三鷹市における市民の総
合的な保健サービス、高齢者福祉、障がい児・
者福祉、学習・スポーツ活動、防災などの拠
点施設のすべてがそろった三鷹中央防災公
園・元気創造プラザの完成に至ったわけだが、
「残るは1965（昭和40）年に竣工した市役
所庁舎・議場棟の建替え事業です」と清原市
長。「この事業は第4次三鷹市基本計画の主要
事業に位置付けられていますが、市とNPO
法人三鷹ネットワーク大学推進機構が共同設
置した『三鷹まちづくり総合研究所』内で
2016年8月から調査・研究を開始。学識
経験者と職員による調査研究の報告書をもと
に、2017年8月には『庁舎等建替えに向
けた基本的な考え方』を取りまとめるとも
に、市民意向調査や無作為抽出の市民による
討議会『みたかまちづくりディスカッション』
なども行い、市庁舎・議場棟などの建て替え
に向けた検討を進めております」

市役所新庁舎については、なるべく早い
段階で基本構想を策定するように努め、コ
ンクリート造りの建物としての60年を迎え
る2025年度中の竣工を目指して取り組
んでいる。

「このようにお話ししてまいりますと、
ハード整備の内容ばかりのように聞こえるか



市民の知的ニーズを満たす場として定着した「三鷹ネットワーク大学」

もしれません。また、とかくハードとソフト
が比較され、ハードにお金を掛けるよりも社
会保障、社会福祉、教育などのソフトにお金
を掛けたほうがいいとする二分法でいわれる
ことも多いのですが、そのような単純化は違
うと、私は考えています。実際問題、質の高
い福祉サービスや教育を提供しようとする
とき、安全安心で堅牢な公共施設は不可欠の基
盤です。それが実現したときに、市民の皆さ
まの活動も、より活性化すると思っていま
す。元気創造プラザはその一つの典型的な形
であり、これから計画を具体化していく市庁
舎等もそうあるべき、と考えているのです」

ちなみに市長の話に出たNPO法人三鷹
ネットワーク大学推進機構が運営する『三鷹



老若男女がまちの課題を討議し尽くす「みたかまちづくりディスカッション」

ネットワーク大学』は、今回の市政ルポの
テーマの一つ、三鷹市の「民学産公の協働」が
生んだ新しい形の「地域大学」だ（2005年
設立）。三鷹市内外に立地する19の教育・研
究機関と三鷹市が共同でNPO法人をつく
り、約60の企業・団体なども賛助会員として
バックアップしている。施設はJR三鷹駅前
の協同ビル3Fに立地。三鷹ネットワーク大
学推進機構主催の講座や講演会などが随時開
催されるほか、移動間仕切りで5人〜120
人程度の使用が可能になる教室スペースが用
意されている（一般の使用は有料）。各種講
座、研修、会議、打ち合わせなど、市民の学
習活動から企業・団体などによる各種小規模
コンベンションに至るまで、まさに「民学産



井の頭公園周辺の森は三鷹市の宝

公の協働」によって、多彩な知的ニーズに応じた使い方ができる。

またもう一つ、「まちづくりディスカッション」も実に三鷹市らしい市民参加の形である。自治基本条例に基づき、清原市政1期目に開始された手法で、市民の意見が必要な案件について、性別や世代的なバランスが偏らないよう18歳以上の市民を無作為で抽出し、討議してもらう仕組みだ。「参加に熱心な少数の市民だけでなく、仕事や学校の関係で市民参加の機会や経験のない

人々に、なるべくたくさん参加していただくための手法」(清原市長)だ。

こうした三鷹市における自治基本条例を最高規範とする徹底した市民参加、民学産公の協働体制の基盤には、市長が学生時代から三鷹市民として市政参画してきた『実体験』が色濃く反映されている。

コミュニティ・スクールが 基盤の小・中一貫教育

「三鷹市の市民参加の歴史は1970年代からの伝統なのです。例えば1974年に完成した大沢地区のコミュニティ・センターを端緒として、市内全7住区のコミュニティ・センターの運営は当初から市民が担ってきました。また、私は三鷹市在住の大学院生だった70年代半ばに地域文庫のお手伝いを1年間だけボランティアでさせていただきましたが、学生が飛び込みでそんな申し出をしても即座に快く受け入れてくれる雰囲気がありました。そして、当時の市長さんから声が掛かり、『第1次基本構想』に基づく基本計画を策定するので、学生代表の市民委員になってくれないかと打診があり、市政に参画するきっかけになりました。また、大学教員の時代には、『第2次基本計画』を策定するための市民会議に専門家の委員として参加するとともに、『第3次基本構想・計画』の策定に際しては、全員公募による市民会議『みたか市民

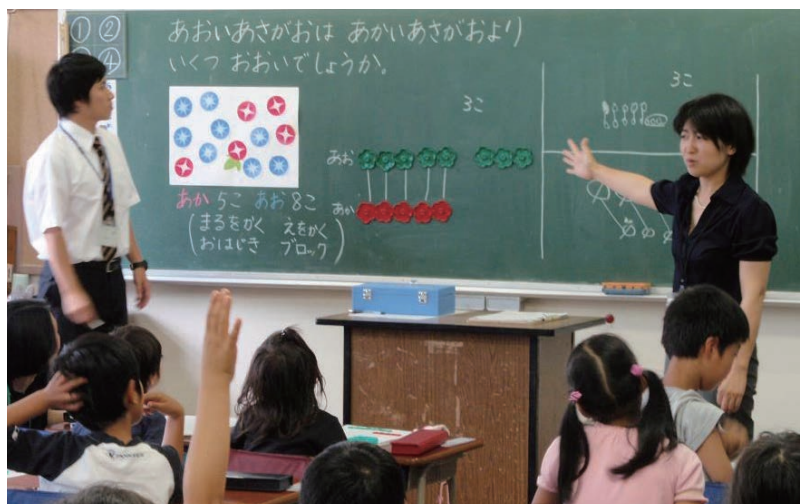
プラン21会議』の共同代表として、基本構想・計画の原案作りに参加することもできました。

そのような形で三鷹市では、行政が市民の声を積極的に取り入れ、市民も行政を信頼するという互いにフラットな信頼関係・相互理解が、いろいろな仕組みの中で培われてきました。私が15年前に『参加と協働』を旗印に市長に就任させていただいたのも、そうした伝統をより多角的に、日常的に、実現していきたいからこそ、なのです」

参加と協働ということでは、清原市長が就任以来、精力的に推進してきた「コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育」



毎年8月開催の恒例「三鷹阿波踊り」には市役所連も出演



東京都で初の小中一貫教育を始めた「にしみたか学園三鷹市立第二中学校」

域の人々が学校運営に積極的に関与するコミュニティ・スクールを基盤とした、小・中一貫教育を推進することを、市長就任時のマニフェストにも盛り込んでいた。

「実はその導入に際して、最も大きな力になった要因の一つが、市民の地域自治意識の高さでした。市内7つのコミュニティ住区で、70年代初頭から各コミュニティ・センターの自主運営がなされ、福祉等各種の市民協働事業が展開されてきたことがその背景にあるのは、言うまでもありません。そうして2004年に三鷹市立第二中学校・第二小学

の導入も、その一環といえる。清原市長は当時社会問題化していた公立中学生の不登校を防ぐとともに公立小学生の基本的学習能力や、理解力の向上を目指して小学校と中学校の円滑な連携や教育の一貫性を担保するための方策として、地



三鷹に独特の魅力を醸し出す国立天文台三鷹キャンパス

校・井口小学校をモデル地区（現・にしみたか学園）に指定したのを皮切りに、今では全7地区（15小学校、7中学校）において、公立の小・中一貫教育（※前出のにしみたか学園のほか、連雀学園、東三鷹学園、おおさわ学園、三鷹中央学園、三鷹の森学園、鷹南学園）が実現しております」

もちろん、住民（市民）自治の意識の高い三鷹市といえども、「コミュニティ・スクールを基盤とする小・中一貫教育」の導入に至る道筋は一朝一夕ではなかった。まず教育委員会、市立小・中学校の校長を中心とする検討委員会を設置して協議を重ね、前述のモデル地区の決定と実践を開始したが、時期尚早との意見から、一度は白紙に戻り



国立天文台三鷹キャンパス内に立地する「三鷹市星と森と絵本の家」

そうになった経緯もある。しかし、その後も粘り強く保護者や地域との意見交換会を続けつつ実施計画の練り直しなど試行錯誤を積み重ね、まず「にしみたか学園」の正式な開園（2006年4月）に到達。2009年度中には全地区での実施が一気に完遂されたのだった。

この間の行政と市民との粘り強い意見のすり合わせなどのプロセスについて、清原市長は「何事も『丁寧に、着実に』の姿勢が大切」と独特の表現をする。冒頭で紹介した「三鷹中央防災公園・元気創造プラザ」が、清原市長就任以来の足掛け15年で完成した事例が象徴するように、何事においても市民の参加を徹底的に促し、市議会の審議を

経て、前提としての市民との相互理解や共通認識の醸成を図る作業は、なるほどすべて、「丁寧」に、着実に」の精神で、行政の側が飽くことなくアプローチし続けなければ成就不可能といえる。

三鷹市の文化的魅力の源泉はさまざま

三鷹市が市民の意識調査をすると毎回、「三鷹市に住みたい」という回答が9割前後の高さを記録するという。その満足度の主因は、東京23区に隣接する多摩地区の入口に位置し、東京駅から約30分、渋谷駅から約25分、新宿駅から15分以内という交通利便性に加えた、豊かな自然環境だ。

約16㎢のコンパクトな市域には玉川上水とともに、神田川の水源「井の頭」の池がある。付随して武蔵野特有の林地が随所に残る。そのような環境が評価され、三鷹には1920年代初頭に東京帝国大学が天体観測施設を建設したのを受け、現在も自然科学研究機構国立天文台三鷹キャンパスが立地している。宮崎駿監督率いるスタジオジブリと三鷹市の協働で2001年に竣工した三鷹市立アニメーション美術館（通称「三鷹の森ジブリ美術館」）もまた、井の頭の森がなければ成立しない企画だった。現代にも色濃く残るそうした閑静な住環境に魅せられ、近代以降の三鷹には太宰治や山本有三、武者小路実篤、吉村昭をは

じめ、多くの文人・芸術家などが移り住んできた。そこから醸し出される文化的雰囲気を楽しむ来訪者も数多い。

「みたか都市観光協会のキャッチフレーズは『市民が観光大使く住んでよし、訪れてよしのまち三鷹』です。市民が地元を愛し、仕事や勉強、地域活動などに生き生きと暮らしている様子そのものが、外から来られる方にも魅力的な三鷹を形成する要素でもあります。さらに三鷹市自治基本条例では『市民』の定義を、住んでいる人、学んでいる人、働いている人、活動している人、としています。そういう意味では三鷹を好み、訪れてくださる市外の方々も広義の三鷹市民と考えます。三鷹市としては、どちらにお住いの方々にも

親切で楽しいまちであり、そういうまちづくりを市民とともに推進している市役所もまた、信頼できる市役所なのだと皆さまに感じていただけるような存在でありたい。市役所の市民満足度の向上を追求して止まない姿勢が、実際に暮らしていただいている市民の皆さまにはなおのこと、信頼につながるのではないかと考えております」

三鷹市は、70年代以降の数々の先進的事業の推進とともに、「コミュニティづくり」「市民協働事業」などへの市民参画が著しく進ちょくしている都市として、昨年11月、「地方自治法施行70周年記念総務大臣表彰」を受けた。まさに「むべなるかな」といふべきだろう。

（取材：文＝遠藤隆／取材日2018年7月13日）



今春にリニューアルされた「山本有三記念館」は瀟洒な洋館



全国から熱心なファンが訪れる「太宰治文学サロン」